

【自著を語る】

マンディ・スワン + アリソン・ピーコック + スーザン・ハート + メリー・ジェーン・ドラモンド = 著  
新井浅浩 + 藤森裕治 + 藤森千尋 = 訳

『イギリス教育の未来を拓く小学校  
——「限界なき学びの創造」プロジェクト』（大修館書店、2015年）

新井 浅浩

（城西大学）

本書は、*Creating Learning without Limits* by Mandy Swann, Dame Alison Peacock, Susan Hart and Mary Jane Drummond: Open University Press, 2012. を翻訳したものである。原著は、今やイングランドを代表する初等学校といっても過言ではないHartfordshireのロックザム校 Wroxham Schoolが何故、OFSTEDの学校監査における最低評価から短期間に最優秀校になり、その後も成長を続けているかを、ケンブリッジ大学の研究チームが二年以上かけて調査した「限界なき学びの創造」プロジェクトの研究成果をまとめたものである。「原著まえがき」にもあるようにロックザム校はイングランドの他の学校と特に変わったところがあるわけではなく、校舎にしても子どもたちの特性にしてもいたって普通の学校であった。教職員の持っている資格や経験も通常と変わらず、学校予算についても特別優遇されているわけではない。他の公営学校と同じく、OFSTEDの学校監査を受けるし、ナショナル・カリキュラムの要請に応える必要もあった（注記：現在ロックザム校はアカデミーになり、ナショナル・カリキュラムからは自由になっている。しかしながら周知のとおりナショナル・テストを受ける必要はある）。にもかかわらず、ロックザム校の子どもの見方、学びやカリキュラムに対する考え方、校長のリーダーシップの取り方は他の初等学校とは基本的に異なったものであった。

「限界なき学びの創造」プロジェクトには、その土台となった研究プロジェクトがある。それが同じくケンブリッジ大学を拠点として故ドナルド・マッキンタイヤ教授とスーザン・ハート元講師を中心に1999年以來すすめられた「限界なき学び」プロジェクトである。同プロジェクトは子どもの能力を固定的に捉える事から脱却した教育の方法を探るというテーマで、イギリスの各地にいた9人の教師たちが加わって研究がすすめられたものである。同プロジェクトの研究成果は、*Learning without Limits* by Susan Hart, Annabelle Dixon, Mary Jane Drummond, Donald McIntyre: Open University Press, 2004. にまとめられている。本書が研究対象とするロックザム校校長のアリソン・ピーコック女史（教育実践の功績により2014年1月女王陛下から「デイム」の称号を受けたので、現在はデイム・アリソン・ピーコック）もその9人のうちの一人であった。彼女は、その後、ロックザム校の校長となり、子どもの能力にレッテルを貼らない「限界なき学び」という哲学を学校全体で実践することとなった。本書のもととなった「限界なき学びの創造」プロジェクトは、「限界なき学び」の原理に基づいた実践を学校全体で実現させるためには、どのような要素が関係するのかを解明したものである。

しかしながら本書は一つの学校の単なる成功物語ではない。子ども全員を大切に、その教育可能性を信じるという共通した価値を持った教師たちが、そのためにこれまでとは違った教育方法やカリキュラムを取り入れていく事に奮闘し、苦労を重ねた記録である。

それでは、同プロジェクトの研究方法を見てみよう。対象者は、研究メンバーの一人でもあるロックザム校のアリソン校長自身、同校の教師、子ども、親である。まずは、学校で起こっていたこと、そして学校のそれぞれの構成員がそれらをどのように見ていたかについて、校長や教師への半構造化面接、校長による振り返り日誌、子どもの意見や学習体験の資料から情報を得るとともに教師たちとの全体討議を行っている（以上フェーズ1）。続いて、教師たちに自分の実践における、ある特定の取り組みに焦点を当てて考察してもらい、授業観察や教師への半構造化面接、校長への面接と校長の振り返り日誌の継続、子どもへの面接、焦点を当てた子どもの親への集団面接を行った（以上フェーズ2）。その際、研究チームは、自分のアイデアや意見、理解を紹介するのではなく、ロックザム校の教職員たちの考えを引き出し精査することに努めていた。そして、それらをもとに作成した記録、その解釈、まとめについて、同校の教師や校長と共有しつつ報告書を作成した（フェーズ3）。データの収集だけでも2年半にわたった同プロジェクトは、参加観察型エスノグラフィーであり、研究チームが校長や個々の教員、子ども、親とやり取りする中で学校改善の新たな進展に寄与するという点でアクションリサーチ的でもあった。なお、アリソン校長自身は、同プロジェクトの4人のメンバーの一人であるとともに研究対象者でもある。すなわち研究の外部者であると同時に内部者でもある。

本書は全6章で構成されている。第1章は、学習や能力に関する決定論的な見方とは根本的に違った見方で学校の成長をとらえることの必要性と可能性など、同プロジェクトの研究の前提について解説されている。第2章は、アリソン校長がロックザム校に赴任してから同プロジェクトが始まるまでの2年間の間に起こった成長について概観されている。第3章では、同プロジェクトの調査期間中の教師一人一人の考え方と実践の展開を検討し、実践の中で彼らが重要と考える共通の要素について考察している。第4章は、同校の実践の基本的要素について、子どもたちと特別な関係を育む活動に取り組んでいる教員チームに焦点を当てて考察している。ここでは、17もの事例が取りあげられ、緻密に考察されている。第5章では、ロックザム校で起こった成長を推進し継続していくために発揮されたリーダーシップの特徴と導入された方略とについて詳細に検討している。第6章では、同プロジェクトがロックザム校から得られたものを総括している。

同プロジェクトの研究成果によって得られた示唆は、第6章において、個々の教師、学校管理職、教師教育提供者、政策作成者に分けて述べられている。一例を挙げると、子どもたちの学ぶ力を高める（変容する）ためになされる個々の教師の実践から得られるものは、どのような文脈におかれようと応用可能であるとしている。それは一つの正しい方法を採用入れるということではない。実際、第3章に見られるように、ロックザム校の教師たちは、それぞれ異なった取り組みをしていたのである。彼らは子どもたちの（そして教師たちの、でもあるが）変容可能性の名のもとに、自分たちで思考し、自分たちで意思決定を行っていた。ロックザム校の教師たちの中で意見が一致していたのは、「学ぶことの自由を拡大させる」ということである。重要なのは結果論としての実践ではなく、思考そのものなのである。その思考とは〈共同主体〉〈すべての人〉

〈信頼〉という「限界なき学び」の教授学的原理に基づくものであり、また子どもたちの学ぶ力を教師が変容させることができるという確信である。これは他の文脈においても転移可能である。

学びに限界がないという信念が、子どもに限らず、教職員、校長、そして学校全体に浸透しているというところがロックザム校の真骨頂であるといえる。我々訳者は2007年に同校を初めて訪問して以来、本年まで毎年同校を訪問し、授業観察やインタビューを重ねてきた。訪問回数は既に10数回を重ねている。それは一つには、ある学校を定点観測し、教育政策をはじめとした内外の環境の変化に対して学校がどのように変わっていくかを観たいという動機もあったが、もう一つは、数重ねる同校訪問において、前回訪問と同じで新しくみるべきものがなかったと感じたことは一度たりともない。それがまさに、子どもたちだけでなく、同校そのものが、「限界なき学び」を実践している証左である。同様のことは同校にいる教員助手についてもいえる。教員助手は正教員の授業補助を役割とし学士号や正教員資格をもたないが、ロックザム校では、教員助手たちが（希望すれば）近隣の大学で学士号を取得するためのサポート（大学に通う時間を有給とすることや学修をすすめていくうえで同校の正教員がメンターとなること等）をし、学士号取得後も正教員資格のための教員養成プログラムを受講するまで続けられた。それらの人は、今、他校で正教員として働いている。これは、教員助手たちの学びが学校共同体全体にとって有益であり、子どもたちの学習へのサポートを活気づけるという考え方からくるものである。こうした姿勢から我々が学ぶことは多い。昨今の主体的な学びにせよグローバル化にせよ、子どもが主役という名のもとに、実行するのは子どもたちだけになってはいないだろうか。

ロックザム校の発展は、原著が発行された以降も続いている。現在、同校はロックザム・トランスフォーマティブ・ラーニング・アライアンス The Wroxham Transformative Learning Alliance を運営し、学校を中心とした教員養成、ワークショップなどの現職研修、共同研究を進めている。これにはイングランド内280校が加盟している。イングランドでは、指導的な役割を果たす学校がティーチング・スクール Teaching School とされ、2016年5月現在736の初等・中等学校が認定をうけている（ロックザム校もその一つである）。そして、一つまたは複数のティーチング・スクールがアライアンスを組み、希望の学校を傘下に入れて、共同で教員養成や研修を行っている。その数は、2016年5月現在577である。通常は近隣の数校または十数校が一つのアライアンスに参画するが、ロックザム・アライアンスの規模は異例中の異例といえる。

最後に本書の翻訳者について触れておきたい。訳者3名は毎年のようにロックザム校に入り調査を重ねてきた。それぞれが授業研究、教育心理学、比較教育学と別々の専門を持っており、それぞれの視点を尊重しつつ、お互い学び合いながらの現地調査であった。本書の翻訳においても、お互いの分担部分を読み合せながら、議論を重ねて作業を進めた。異なる専門分野を持つものが協働して研究に取り組むことは、教育研究の分野でも、それほど一般的ではないといえるだろう。このことが本書の翻訳に活かされたかどうかは、読まれた方のご判断に委ねたいと思う。なお、本書の続編ともいえるアリソン校長の近著 *Assessment for Learning without Limits* by Alison Peacock : Open University Press, 2016. が本年7月に発行されたことを付記しておく。